

マドリッド地理学協会の創設と 初期の活動 (1876-1901)

——スペイン地理学会史の一側面——

栗原尚子

I 序論

本稿は、1876年に創設されたスペインのマドリッド地理学協会 La Sociedad Geográfica de Madrid に焦点をあて、その創設の経緯を手がかりに、当時のスペイン地理学界をめぐる状況の一端を考察することを目的としている。

各国における地理学会の創設および歴史に対する関心は、近年たかまる傾向にある。1984年、パリで開催された第24回国際地理学会大会における地理学史研究のセッションで、T. W. Freeman は、Royal Geographical Society の創設に関する報告で¹⁾、このようなテーマに取り組むことの必要性を強調し、その後の討論で、各国の研究状況についてフロアからの情報をひろく求めたのも、そのあらかのひとつといえよう。これまで学会史研究に関しては、近年では Royal Geographical Society を対象とした T. W. Freeman やパリの La Société de Géographie を対象とした A. Fierro など注目すべき業績が出されている²⁾。日本では、すでに1969年に、石田龍次郎が東京地学協会を対象とした研究³⁾を発表しているのはよく知られるところであるが、総じて非西欧諸国における研究例は未だ数少ない。西欧諸国でも、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカなど近代地理学の確立に大きな影響を与えた諸国に限られている。

今日、学会史研究の必要性が着目される背景には、地理学説史の研究が、近代地理学の確立に与った傑出した地理学者あるいはその学説

を跡づけるだけでなく、各国において近代地理学の導入がいかになされたのか、あるいはいかに受容されたのか、その制度的確立に学会が果たした役割の重要性に目が向けられるようになったことがあげられる。P. Claval や T. W. Freeman が、高等教育における地理教育の確立や学派の形成の過程を重視するものこのような枠組においてであり、同様に日本においても、国際地理学会地理思想史研究委員会のメンバーを中心に1970年代から成果が積み上げられてきている。第2に指摘される背景としては、地理思想の歴史における19世紀末に対する関心である。「人文地理学は、1870年に始まる世代の伝統に生きている」⁴⁾と指摘されるように、今日の地理学が直面している諸問題を学説史的に整理し、地理学を再構築する作業の出発点としてとらえることもできよう。そのような試みもみられる⁵⁾。また、N. Broc は、フランスを例に、1870—1890年ほど地理学がひろく一般に膾炙されたことはない指摘し、この時期にとくに焦点をあてて、地理学の普及、制度化を跡づけている。表1に明らかなように、学会の創設の推移は、このような状況を反映していよう。周知のように地理学会が初めて創設されたのは、1821年のパリにおける Société de Géographie であり、1828年のベルリンにおける Gesellschaft für Erdkunde、1830年のロンドンにおける Royal Geographical Society がそれに続いている。1869年まで20を数えるにすぎなかった学会は、1870年代に34、1880年代に28が新たに創設され、その数を急増させている（表1参

表1 年代別学会創設数の推移（1820—1940）

年 代	学会数	年 代	学会数
1830—1839	4	1890—1899	10
1940—1949	2	1900—1909	11
1850—1859	6	1910—1919	10
1860—1869	6	1920—1929	30
1780—1879	34	1930—1940	2

出典 注 5) H. Capel Saez ⑤ p. 184

照)。学会構成員数の推移をみても同様の傾向があらわれている。パリの Société de Géographie を例にとると、1821年の創設時会員数217人は、その後減少の途を辿ったが、1870年代以降増加に転じ、1876年には1,624人に達している。本稿でとりあげるマドリッド地理学協会が創設されたのは、1876年であり、1870年代の国際的な地理学会の動向を反映しているといえよう。本稿の関心は、19世紀末のスペインの地理学を学説史的に検討する作業の前提として、マドリッド地理学協会を例として、学会の創設がどのような歴史的社会的状況のもとで、どのような役割を果たしたのかという点を考察することにある。

スペインの地理学史に関しては、バルセロナ大学の H. Capel Saez が第一線にあり、数多くの優れた研究成果を発表し⁶⁾、内外から高い評価を得ているが、マドリッド地理学協会に関しては、学会の制度的確立を国際的に展望した論文で概略的にふれ、帝国主義的拡大の時期にプロパガンダとして果たした同協会の役割が指摘されているにすぎない⁷⁾。M. Alonso Bacquer が、19世紀のスペインの地図学史において軍部が担った貢献に関する研究において⁸⁾、同協会の創設にかかわった Francisco Coello をとりあげ、同協会の創設の経緯を地図学の制度的確立の中で位置づけた他は、バルセロナ大学の J. Vilá Valentí が、同協会創設100周年の折に招かれて講演したものを纏めた論文に限られている。Vilá Valentí は、①同協会設立以前のスペインの地理学の発展状況を Pascal Madoz と Francisco Coello の傑出した2人と制度的

確立の過程との2つの側面から跡づけ、②同協会設立にかかわった群像とその設立目的の解明という2つのアプローチから論文を纏めている⁹⁾。しかし、石田龍次郎が、東京地学協会報告を手がかりに、東京地学協会を詳細に検討した研究事例とは異なり、むしろ19世紀のスペイン地理学の状況に比重をおき概観したにとどまっている。

マドリッド地理学協会は、今日でも存続しているが、とくに目だった活動をしているわけではない。スペインの地理学の発展において同協会が果たした役割は、1930年代までといえよう。1936—1940年の市民戦争を経て、1940年には Instituto Juan Sebastian Elcano が設立され、その機関誌として Estudios Geograficos が発行されるようになり、さらに、1941年には Jaca で全国的規模での第1回地理学会が開催されるようになってからのスペイン地理学界は、それ以前の時期とは一線を画している。1930年代までの同協会の歴史をふりかえってみても、19世紀末までの創設期と、地理学教育の重要性や地理学本質論が機関誌に登場するようになるそれ以降とでは、同協会が果たした役割の性格も異なっている。それは、1901年に、同協会の社会的貢献が認知され、王勅命により、La Sociedad Geográfica de Madrid から La Real Sociedad Geográfica へと名称が変わり、政府からの補助金が出されるようになったことにも反映している。したがって、本稿では、まず同協会の創設期（1876—1901）に焦点をあて、機関誌 Boletín de la Sociedad Geográfica de Madrid（以下 Boletín と略記する。なお1901年からは Boletín de la Real Sociedad になる）を基本的な資料とし、その分析を通じて、同協会の創設の経緯、目的、会員の社会的構成、指導的役割を担った人物、同協会が果たした役割を中心に考察することとする。創設期以降の問題に関しては、稿を改めて論じたい。

II マドリッド地理学協会の創設

本章では、まずマドリッド地理学協会創設当

時の状況を Boletín に毎号掲載されている評議員会議事録をもとに整理し、事実を再構成することを主眼とする。その分析、他学会との比較、当時の地理学会の歴史的な性格などについては、次章において明らかにしたい。

1. 創設の経緯

Boletín の第 1 巻 1 号には、1876 年 2 月 2 日、王立歴史協会の会議室の一室を借りて開かれたマドリッド地理学協会創設の会合の様子が記されている¹⁰⁾。この会合への参加の呼びかけは、Francisco Coello, Eduardo Saavedra, Maldonado Macanaz の 3 名によってなされ、当日は、内務大臣 Torres 伯爵を主賓とし、Coello が呼びかけの主旨説明を行なっている。その内容は、同協会の創設時の性格を一面でよく物語っているため、以下にまとめて列記したい。まず第 1 に指摘できる特色は、栄光のスペイン帝国がいかに後進的な状況におかれているかの認識であり、ラディカルな近代化論者としての Coello の立場を示している。同協会創設の直接的契機となったのは、1875 年にパリで開催された国際地理学会へ代表として参加した結果得た経験であった。各国からの地理学協会からの代表が参加しているのを目のあたりにして、スペインにはそのような組織が存在していないことに対するなげきであり、会議中にはかのイタリア語でさえとびかっているのに、カスティリャ語は全く聞えてもこないことに対する屈辱感が吐露されている。さらに遅れをとっているという焦燥は、近年めざましい未開の地の探検とその地理的情報の蓄積に関連して一層顕著に表明されている。世界の探検史において新大陸発見という栄光をもつスペインが、今や列強の最大の関心となっているアフリカ大陸に対しては出遅れ、この遅れを取り戻すことの必要性が強調されるのである。第 2 の特徴は、地域研究がもっている意味に関連している。国外に対して向けられた探検と地理的情報の蓄積の目を国内にも向けることの必要性である。隣国フランスの地理学がはるかに進歩した水準にあるにもかかわらず、対独戦争に敗北した原因を教訓としてと

りあげ、地理学の振興とその普及の重要性が指摘される。さらに、19 世紀前半にスペインが直面していた各地方の地域 Comarca における様な旗の下に生じた内乱に対しても、その早期解決をはかるためあるいは未然に防ぐためにも地理学的な地域研究が有効であることが指摘されている。このような地域研究の方法は、キューバ、フィリピンなどの海外領土にも拡大され、植民地統治に応用しうることも付け加えられている。第 3 の特徴は、地理学の発展にかかわるものである。今や単なる異郷の地のエキソソズムに対する関心だけではなく、国民すべての社会階層にとって有益な一般地理学の進歩を知らしめること、かつてのような百科事典的記述としてではなく説明するための体系を構築することの重要性が説かれている。以上のような状況の下で、地理学にかかわる研究は、持続的に継続されることが必要であり、会議や定期的出版物を通じてその結果を発表し、知識を一般に普及するための組織として学会を位置づけ、その創設を呼びかけたのである。

創設会合における参同者は、D. Antonio Aguilar(天文観測所長)、Salvador de Albacete(検事)、A. Alvarez de Araujo(陸軍第 1 補充兵団長官)、Fermín Caballero(前内務大臣)、Carlos Campuzano(道路建設学校長官)、M. Fernandez Castro(スペイン地質図研究所長官)、Carlos Ibañez(地理研究所長官)、Manuel Moreno(統計顧問委員会委員)、Claudio Montero(水路測量部長官)、Agustín Pascual(山地測量顧問委員会委員長)、Tomás de Reyna(砲兵隊少将)、M. Maria del Valle(地理歴史学講座教授)であった。

組織づくりのための委員会が 2 月 6 日に開催され、そこで会則、定期刊行物の発行(年 6 回、発行部数は 4 月 29 日委員会で創刊号を除き 1,500 部と決定される。創刊号は 2,000 部)、評議員会の選出の日程、会員募集等が議題とされている。3 月 5 日に第 1 回総会が開催され、続いて、3 月 24~27 日にかけて会長 1、副会長 4、書記 4、評議員 24 が選出され、初代会長に

は、Fermín Caballero, 副会長には F. Coello, Carlos Ibañez (辞退により次点の Eduardo Saavedraに), Claudio Montero, A. Fernandez Guerra が選出されている。さらに4月8日の委員会で、毎月第1・第3土曜日に定例会を開催すること、年間会費を120レアーレスとすること、定期刊行物 Boletín には、地理学と関連分野の論文を掲載すること、学会賞を設けること、地理学文献・地図の収集を行なうことなどが決定され、協会の基本的骨子がほぼ決定され、以後活動は軌道にのって行く。

2. 会 則¹²⁾

F. Coello と Saavedra によって作成された会則は、すでに長い歴史をもつパリの Société de Géographie, ベルリンの Gesellschaft für Erdkunde, ロンドンの Royal Geographical Society および歴史は新しいが、ローマの Societa Geografica Italiana をモデルとし、その内容は多くの点で類似したものになったことが説明されている。会則は30条にわたっているが、主要な項目を要約すると以下ようになる。

第2条(目的) 地理的知識の発展と普及の促進を図る。

第3条(研究) 協会は、スペイン領土およびその諸県、あるいは海外領土の研究を優先的にを行い、同様にすでに重要な関係が存在する諸国あるいはそれを促進するのが適当とみられる諸国の研究にも従事する。

第4条(方法) 定期的総会・例会の開催、定期的機関誌の発行、……地理学文献の収集を行なう。他の地理学協会や同じような研究に従事する組織との関係を維持し、探険家・旅行家に可能なかぎりの援助と知識とを提供する。

第18条(会員) 協会は、住所がどこであれ通常会員によって構成される。外国人であってもスペイン人と同じ会員資格が認められる。……5月総会の1カ月前に加入した者は、創立会員を称号を付与する。

第22条(名誉会員) 優れた業績や探検を成した外国人に名誉会員の称号を付与する。

第23条(名誉会員) 国王あるいはその親族、

国家の重職にある者、協会に加入するには高い社会階層に属する者に名誉会員の称号を付与する。協会あるいは地理学に対して優れた活動を成した者にも同様の称号を付与する。

第28条(賞) 資金が確立次第、年間第1等賞2, 第2等賞2の賞を選定する。

第30条(運営資金) 会誌販売および寄付。

すでに記したように、歴史の古い学会の会則を参考にして作成された上記会則は、当然のことながら、それらと共通性を持ち、当時の学会の歴史的特質を表わしているが、その点については本章の最後で要約したい。なお、協会名に「スペインの」という語が入れられていないことに対する論議がなされているが、今後、類似の団体が他でも創設される可能性もあることから同語を冠することを避けたと説明されている。

3. 会員構成およびその推移

創設年の会員数は629人であるが、この中には名誉会員としての Toreno 伯爵, La Academia de la Historia 会長 A. Vinavides, フランスアカデミー歴史学部門の名誉会員 Viven de Saint-Martin を含んでいる。普通会员の社会構成を職業によって分類すると、6つのカテゴリーに大別できる(表2参照)。

最も多いのがⅢの民間技術者集団で、その内訳は、道路建設技術関係81, 山地・鉱山開発技術関係59となっている。これに続くのがⅣの軍関係技術者集団で、陸軍関係者71, 海軍関係者40の他、参謀本部直属の軍人も含んでいる。Ⅰに分類した専門的科学家集団は、その専門を具体的に記していないのが45あり過半数以上を占めているが、記されているものの中では歴史が多い。この時期には、未だ大学に専門的な地理学講座が設置されていないため、地理学に関しては、地理学と数学を専門とするという2例がみられるにすぎない。このような状況は、Ⅱに含めた地形図作成に関する技術者集団とともに、1870年代におけるスペインの地理学界を反映しているといえよう。この点は、地理学協会創設に参同者として名を連ねた人達の社会的カテゴリーからも推測できることではあった。さらに、

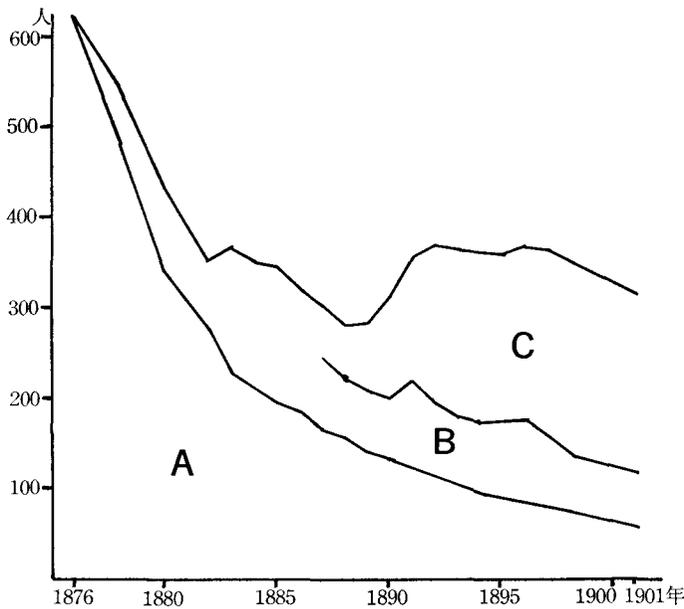


図1 マドリッド地理学協会会員数の推移 (1876—1901)

注) A : 創設会員数
 B : スペイン人会員数
 C : 外国人会員数

表2 マドリッド地理学協会会員の職業による社会的構成の変化

(単位: %)

社会的構成	1876	1901
I. 専門的科学者集団	14.0	25.4
II. 地形図作成技術者集団	6.2	11.6
III. 民間技術者集団	26.7	—
IV. 軍関係技術者集団	23.2	18.6
V. 政治家・外交官	10.9	16.4
VI. その他	9.1	10.3
VII. 不明	19.9	17.6
合計	100.0	100.0

IVに一括したその他の集団のうち、数としては少ないが探険家・旅行家がみられること、また数多くのアマチュアの加入は、スペインだけでなく、この時期における地理学会の特徴を示すものとして無視できない。

会員の居住地をみると、マドリッド以外のスペインが181、外国48で、圧倒的にマドリッド

を中心としているが、後に述べるように、結局、学会構成員の主要な基盤をなしたのは、スペイン国土全体をおおう大縮尺の地図作成を担った技術者集団であり、その国家的事業はマドリッドを中心としていたことの結果でもある。外国人会員の内訳は、ラテンアメリカ22 (キューバ16、プエルトリコ4、その他2)、フィリピン6、アフリカ2、ヨーロッパ11、その他7であった。キューバ、プエルトリコ、フィリピンなど、植民地諸国における会員が大部分をしめている。

図1に明白なように、創立時に626人を擁した会員数は毎年減少を続け、1888年には281人となった。90年代にわずかながら増加に転じ、360人台を維持したが、98年以降再び減少傾向にある。このような減少は、創設会員(会則により特別に規定)の著しい減少に起因しており、それを補うだけの新規会員の拡大をはかれなかったことを物語っている。対照的に、外国人通信会員の増加が顕著で、1893年以降、外国人会

員数はスペイン人会員数と逆転し、その差は拡大し続けている。このような推移の実態を、1901年の会員リストを参考にみると次のような指摘ができよう¹³⁾。

①外国人会員数の増加。199人のうち35人は名誉会員で、F. リヒトホーヘン、E. ルヴッソール、E. ルュクルなど16人の著名な地理学者、E. H. スタンレーなど7人の国際的な探検家・旅行家を含んでいる。通信会員の46人はその職業が不明であるが、それを除くと、専門的学者集団（I）と外交官・官吏集団（V）が、各々32人と最も多い。表2に明らかなように、（I）の割合が顕著に増加しているが、（I）にはヴィダル・ド・ラ・ブラージュをはじめ15人の地理学者が名を連ねており、名誉会員である16人の地理学者とともに、地理学会としての存在の根拠を外国人地理学者が代弁している感を与えている。

②ヨーロッパにおける外国人会員の増加。1898年、ラテンアメリカにおける最後の植民地キューバとプエルトリコを喪失した結果、植民地における会員は、モロッコの3人のみとなった。歴史的つながりから、ラテンアメリカが総数としては多い。国別ではフランスが25人と最も多く、ポルトガルが16人と続いている。多くのフランス地理学者が名を連ねていることは、当時のフランス地理学の導入によりスペインにおける近代地理学の確立を目ざしたマドリッド地理学協会の立場を示している。

③スペイン地理学の後進性。スペイン人会員の社会的構成をみると、民間・軍関係の技術者集団（ⅢとⅣ）が、ほぼ同数をしめ、主体をなしていることは、基本的に社会的構成が創設時とほとんど変化していないことを表わしている。専門的地理学者として記されているのは、同協会の活動を積極的に担った、R. Beltrán y Rospide, R. Torres Campos の他3人にすぎない。地理学関連分野を加えても、地理統計所前所長および地理学者2人のみである。

スペインにおいて、高等教育での地理教育の確立・専門的地理学者の育成の立ち遅れが、学

会の拡大・発展を制約していたのが明白となる。近代地理学を受容する制度的枠組の整備は急務であった。

スペイン国内における一般会員拡大の限界を補完するものとして、機関会員の存在は無視できない。後に述べるように、同協会の財政的基盤の確立と切り離せないことであるが、1901年には、54機関が購読会員となっている。しかし、その具体的内容は、軍関係および国家レベルでの行政関係省庁の図書館がほとんどで、教育機関には全く浸透しておらず、地理教育普及に対する同協会の直接的影響の希薄さを反映している。

④階層的会員構成。Royal Geographical Society に範をとり、当初から王室による特権的庇護を名目的にとっており、さらに、会則に名誉会員の認命を唱っている以上、組織構成が階層的になるのは必然ではある。しかしその傾向が、年を経るに従い強くなっているということは指摘できよう。創設時には既に記したように、名誉会員は4人であったが、1901年には42人に達し、一般会員数に比してアンバランスな構成となっている。このことは、著名な外国人地理学関係者を名誉会員に推薦するという方法を通じて、国際的にスペインを代表する地理学会としての地位を確立することに目がむけられていた当時の同協会の性格を物語っているともいえる。

4. 財政的基盤

学会財政の収支の推移は、表3に示す通りである。収入の大部分は会員会費によって賄われ、支出の大部分は会誌編集費が占めている。表4に示すように、会員数と比してみた場合、会員1人当たり予算額は、Société de Géographie の約32マルク、Gesellschaft für Erdkunde の約30マルクに対して28マルクであり、ほぼ前2学会に匹敵している。従来マドリッド地理学協会の財政基盤に関して、当時の多くの学会が中央政府からの補助金を受けていたのに対し、同協会はそれを受けていないことが特色とされてきた¹⁴⁾。会則30条にも明記され、運営資金は会

誌販売と寄付であり、王室による庇護を受けていても、名目的で実質的財政的援助は受けていない。ロシア帝国地理学会が、総予算の約26%を政府補助金によっていることや、政府による

財政的援助が当時の学会に共通する特色であったことを考慮するとその感が一層強まるかも知れない。マドリッド地理学協会が、1901年に、商業地理スペイン協会 Sociedad Española de Geografía Comercial と併合し、王立地理学協会となつてから政府の財政的後援を受けるようになったことはすでに記した。しかし、これ以前にも別の形態で間接的援助は受けているのである。1878年にすでに、内務省による会誌買い上げという形態で、6,000ペセタが予算に計上されている(当時の会員の一括払い年会費は250ペセタ)。総予算の約25%に達している。年によってその額に変動があるとはいえ、相当額が例年計上されており、財政的基盤の確立に果たした役割は無視できないであろう。

Royal Geographical Society の主要な目的が、興味深いかつ有益な地理的事実および発見に関する出版活動、探検の後援、探検家の教育、図書や地図のコレクションにあった¹⁵⁾ことを想起すると、以上のようなマドリッド地理学協会の創設および活動の骨格づくりは、当時の先進的な地理学会と共通点を有する。同協会が、ロ

表3 マドリッド地理学協会財政報告
(単位：ペセタ)

年	予 算	決 算
1876	15,872	7,850
78	14,589	9,869
1880	21,457	15,111
82	17,999	17,999
84	16,437	16,437
86	17,048	13,719
88	16,595	14,072
1890	15,051	12,165
92	13,869	10,444
94	12,852	12,019
96	9,477	9,682
98	12,140	11,315
1900	21,817	13,177

資料：Boltín de la Sociedad Geográfica de Madrid 各巻会計報告より作成

表4 1878年における主要学会の会員数および財政

(単位：人，マルク)

学 会	会 員 数	予算総額	政府補助金額
ロシア帝国地理学会 (サン・ペテルスブルグ)	664	181,960	48,460
Royal Geographical Society (ロンドン)	3,334	169,000	10,000
Société de Géographie (パリ)	1,624	53,000	—
American Geographical Society (ニューヨーク)	1,200	50,000	—
Instituto Histórico e Geográfico (リオ・デ・ジャネイロ)	60	36,938	—
Gesellschaft für Erdkunde (ベルリン)	730	22,500	1,500
Società Geografica Italiana (ローマ)	1,476	21,692	—
Sociedad Mexicana de Geografía (メキシコ)	345	17,670	17,670
Société de Géographie (マルセイユ)	500	17,600	4,000
Sociedad de Geografía de Madrid (マドリッド)	550	15,800	—
Société de Géographie (リヨン)	430	15,220	4,000
Société Belge de Géographie (ブリュッセル)	831	14,368	—
Geographie Gesellschaft (ウィーン)	348	13,184	200
Kon Dauske Geografiske Selskab (コペンハーゲン)	900	10,575	1,125
Société de Géographie Commerciale (バーデン)	1,120	10,240	600

出典 注 5) H. Capel Saez p. 187

ンドン、パリの地理学会に範を取ったことから当然の結果ではある。最後に共通する活動方法として指摘しておきたいのは、講演会による例会方式を活動の中心的形態としていたことである。同じように Royal Geographical Society に範をとった東京地学協会も、通常例会方式をとり「異国の旅行見聞談」が主であって、これを『聞いて楽しむ』という要素があったと想像される¹⁶⁾という指摘に共通する。「日本の諸団体、とくに学術的団体としては稀有例外なことであるが、西欧社会の団体ではごく当り前のことであった。」¹⁷⁾のであろう。

Ⅲ マドリッド地理学協会活動と地理学

本章では、マドリッド地理学協会の活動について、(1) 中心的活動を担った F. Coello、(2) 同協会が果たした役割に焦点をあて、当時のスペインの地理学界の状況と関連づけながら検討を試みることにする。

1. F. Coello とマドリッド地理協会における活動

Francisco Coello de Portugal y Quesada (1822—1898) は、マドリッド地理学協会創設に尽力し、初代会長 Fermín Caballero が創設後3カ月で没してから、その後を継ぎ、1876—1878年および1889—1898年間に会長職を勤め、同協会の初期を誰よりも代表する人物であった。本節で F. Coello に焦点をあてるのは、彼の活動を通して当時のスペイン地理学界の状況を照射し、そのことにより、同協会の性格を歴史的に位置づけることが可能と考えるからである。

1898年、マドリッドで没した F. Coello に対して寄せられた Societé de Géographie, Royal Geographical Society, American Geographical Society の機関誌上における紙牌は¹⁸⁾、当時のスペインを代表する地理学者として国際的に著名であったことを物語り、彼の業績として高く評価されたのが1863年に公刊された『スペインおよび海外領土のアトラス Atals de España y de sus Posesiones de Ultramar』であった。

このアトラスは、各県を対象に1:200,000のスケールで作成されたものである(海外領土県は1:1,000,000のスケール)。既存の地図、とくにフランスにおいて彼が収集したもの¹⁹⁾を基礎にした修正図ではあるが、イサベル二世治下、その作成が著しく遅れていたスペインのナショナル・アトラスの刊行を切望していた穏健派の要求を充たすには十分であった。のみならず、当時の段階では満足すべき水準にあるものであったといえる。F. Coello に対するリヒトホーフの地図学者としての評価も同アトラスに基づいている。F. Coello の活動は、ナショナルなレベルでの地図作成とそれに関連した国土の測量に没頭した初期の活動とその後のマドリッド地理学協会における活動とに大別できる。それはまた、同協会の初期の歴史的な性格を規定するのに少なからずの影響を与えている。したがってまず、地図作成にかかわった F. Coello の初期の活動に焦点をあてて以下に詳述したい。

職業軍人として出発した F. Coello は、カルリスタ戦やスペイン政府派遣のフランス軍補佐官としてアルジェリア戦に参加し、戦績をあげた。軍人として将来を嘱望されていたが途中で退役し、1846年からは技術局 La Dirección General de Ingenieros に移籍し、地図作成に着手する。以後の彼の活動は、現役軍人としてではないまでも軍部に所属しながら陸軍技術者として科学的研究に従事するというものであった。前述の『アトラス』の仕事をする一方、1853年には統計委員会の一委員として、D. Francisco de Luxán, D. Agustín Pascual とともに『スペインにおける地理的・地質的・農業的概要 Reseñas geográficas, geológicas y agrícolas de España』を纏め、また1855年にはこの期を代表する『スペイン半島部における船舶と鉄道の一般的交通路に関する計画 Proyecto de las líneas generales de navegación y de ferrocarriles en la Peninsula Española』という500頁に達する大部の報告を刊行している。1861年には、測量・土地台帳作成委員会の委員

長に任命され、国土の三角測量の実施、および緊急を要していた土地台帳の作成に力を尽している。とくに遅々として進展しない土地台帳作成に関しては、マドリッド地理学協会機関誌 *Boletín* でもそれが有する社会的意味の重要性を繰り返している。その主張の基本的立場は、スペインの後進性に対する焦燥感に満ち、いかに他の先進ヨーロッパ諸国なみにスペインを近代化するのに苦慮する「進歩的」近代化論者と立場を共有するものであった。

F. Coello の地図作成にかかわる活動は、高等教育機関における専門的地理学者集団が輩出する以前の段階で、マドリッド地理学協会の会員の主体をなしたのが、地図作成に係わった技術者集団であったことと無関係ではない。多くの地理学会が創設された1870年代の地理学は、人間と自然現象を総合する科学として、地理学論の内的発展に新しい要素が加わり、近代地理学確立の萌芽がみられたものの、多くの場合、社会において地理学がおかれていた立場が未発達な状況の下で、18世紀までの地理学の流れを踏襲している移行期にあったと考えられる。したがって、近代地理学の発達にとって重要な地図作成のための機関あるいはそれと密接な関連をもつ統計資料収集の機関が制度的に整備されていく過程は、スペインにおいて地理学会が創設されるにいたるまでの経緯を考察する鍵ともなる。同時に、後進的スペイン社会の近代化過程を地理学史の一側面から跡づけるという興味ある課題に接近する一歩ともなろう。したがって以下にこの問題について簡単に素描しておきたい。

スペインにおけるナショナルな大縮尺の地図作成が、とくに、フランスに比してかなりの遅れをとっているという認識は、すでに19世紀初めから軍部の開明的近代化論者の中にはあった²⁰⁾。その契機となったのが、ナポレオンによる侵略であった。18世紀末からのラテン・アメリカ植民地における独立運動の昂揚、イギリス帝国の覇権の強大化により、海からの攻撃に対する防衛に関心が向けられ、海洋図、沿岸部の

地図作成はかなり進んでいたが、本国の膝元の領土がピレネー山脈を越えて陸上から侵略される可能性に対しては無防備であったといわれる。このような国防上の問題、さらにマドリッド地理学協会創設の際に F. Coello が明言したように国内における内乱等の治安問題が加わり、大縮尺の地図作成を緊急課題とする歴史的社会的要因が醸成されたのである。具体的には、まず第1に、1833年の近代的中央集権の行政機構確立のための県 *provincia* 制度の導入に伴い、県境を正確に画した地図の作成が急がれたこと、第2に、最終的には1855年の P. Madoz による「永代所有財産」解放令 *desamortización* に代表されるように、農地の私的所有権確立に伴う正確な土地台帳の作成の必要性、第3には、鉄道をはじめとする近代的交通・通信網の整備に伴う測量・地図の作成の必要性、第4に、始動しはじめた資本主義経済の発展に不可欠な鉱山資源の開発に必要な情報の収集等であった。スペイン社会の近代化過程の推進、ナショナリズムの昂揚と結びついた国土の再編に伴う国土管理の一貫として、地図作成機関の制度的確立を位置づけられよう。

以上のような状況を背景に、1853年、内務省にスペイン地図作成幹部会 *la Junta Directiva de la Carta Geográfica de España* が結成され、フランスに範をとった委員会（後に地図委員会 *la Comisión de la Carta*）を構成したが、ナショナル・マップ作成は陸軍省に委任されている。以後、スペインの地図作成は、軍部と文民レベルの機関で主導権をめぐる確執が繰り返されるが、これは地図作成のみにかかわる問題でなく、国家組織においてあるいは社会生活においてもスペインを特徴づけるデュアリズムであった。1856年、統計委員会 *La Comisión de Estadística* が設立され、その長官に *Carlos Ibáñez de Ibero e Ibáñez de Ibero*（以下 *Ibáñez de Ibero* と記す）が任命され、同時に地図作成も同委員会に統合され、さらに1859年国土測量令公布に伴い、地図作成の責任は、陸軍省の外部におかれることになった。しかし、1866年、

P. Madoz, F. Coello, F. Caballero 等により地図作成がもつ軍事的意味から反対意見が出され、再び権限は参謀本部に移譲され、1869年にスペインにおいて最初の科学的な地図とされる1:200,000スケールの軍事用地図が完成されている(1922年までに全国110葉を完成)。他方、Ibáñez de Ibero は、F. Coello とは立場を異にし、地図作成のためには、マドリッド天文台と1853年以来の地図委員会の下で育成されてきた約300人の測量技術者の協力が必要と考え、1870年に設立された統計局の下での地理研究所 Instituto Geográfico (1873年 Instituto Geográfico y Estadístico に改組)で活躍する。この地理研究所設立により、軍部から切り離れた1:50,000スケールの地図作成が行われ、1875年に最初の一葉マドリッドが公刊されている。以下のような経緯は基本的には当時の政治状況を反映するものであり、政界における穏健派と進歩派との対立を示すものであった。前者は、地図作成をすべて陸軍に中央集権的に統合しようとする立場を代表し、後者は、参謀本部と地理研究所の2つの中心に地図作成を分散し、陸軍の干渉を排除しようとする立場を代表していたのである。1870年の地理研究所の設立は、穏健派の政治的失脚の結果であった。

Ibáñez de Ibero は、1891年まで地理・統計研究所長官としてその任を果したが、すでに記したように、マドリッド地理学協会との関係は、創設の際、副会長に推挙されたが、激職にあることを理由に辞退したのちたち切れている。

以上のように、1870年代には地図作成に関わる専門家集団がかなり形成されており、その中でもとくに、軍関係の技術者集団が、F. Coello の影響を受け、マドリッド地理学協会に参画したのである。前章3節において示した会員の社会的構成のIVに相当する部分である。

最後に、F. Coello の地図作成に関連し付言しておきたいのは、P. Madoz の『スペインおよび海外領土の地理的・統計的・歴史的辞典 Diccionario geográfico-estadístico e histórico de España』のための地図である。地理学史か

らみて、近代地理学確立以前の一時期を画した百科辞典の刊行が目されるが、P. Madoz の同辞典は、スペインにおいても18世紀に陸続した百科辞典の刊行²¹⁾の最後を飾るにふさわしいものであった。1845年に第1巻が上梓され最終巻が刊行されるまで15年11カ月を費やしたのである。この辞典用の地図作成が F. Coello に依頼され、1850年段階で、F. Coello は6葉の地図をすでに完成していたとされるが、最終的には主に軍事的理由から公刊されることはなかったとされている(各県を対象とし、そのスケールは1:280,000)。P. Madoz が辞典の刊行を試みた背景には、まず第1に、フランスにおける百科辞典の水準の高さに触発され、スペイン国内の現実を正確に記述することに関心があった。その根底には混乱を深める社会的状況を打開するための秩序の確立に役立てたいということ、繰り返される現実から乖離した不毛な政治的イデオロギー的闘争に終止符をうちたいという願望があった。しかし、F. Coello の立場は微妙に異なり、彼の目は主に海外領土に対するスペインの主権確立と防衛に向けられ、そのためには、例えば、同辞典に記された海外領土の国境線の確定に関してスペインのために修正がなされることもあったのである。それは、まさにこの時代を特徴づける他のヨーロッパ諸国における帝国主義的拡大と植民地分割に対する関心と軌を一にするものであったといえる。F. Coello の地図作成に対する関心の根底を規定し、彼の活動のもう1つの柱をなすコロニアリストあるいはアフリカニスタとしての彼の別の顔を象徴するものであった。

F. Coello のアフリカに対する関心は、既に記したように、未だ軍籍にあった時に加わったフランスのアフリカ委員会 la Comisión de Africa での経験に始まる。同委員会は、1844—1845年にモロッコからチェニスまでアルジェリアを踏査し、その結果を見開き1,500頁に及ぶ浩瀚な『アルジェリアに関するメモリア』という報告書として残した。それに付された30葉の地図は F. Coello の手に成るものであったが、

記された情報の性格からともども公刊されることはなかった。その後、F. Coello とアフリカとの関係が華々しくなるのは、ヨーロッパ列強諸国の帝国主義的植民地分割が激しさを増すさなか、1876年にベルギーのレオポルド二世の主宰によって結成された「アフリカ探検協会」のスペイン支部 la Asociación Española para la Exploración del Africa がアルフォンソ XII 世を冠して創設された1877年である。F. Coello はその支部の副会長に就き、会則の策定にあたっている²²⁾。さらに「スペインアフリカニスタ・コロニアリスタ協会 la Sociedad Española de Africanistas y Colonialistas」(1885年結成、96年に植民地地理学協会 la Sociedad de Geografía Colonial となる)の会長職をつとめ、1892年には大会委員長として「イスマノ・ポルトガル・アメリカ地理学会議 el Congreso Geográfico Hispano-Portugués-Americanos」を新大陸発見 400 周年を記念して開催している。このような F. Coello のアフリカニスタあるいはコロニアリスタとしての活躍が、マドリッド地理学協会の活動にどのように影響を及ぼしたのか、この時期の同協会の歴史的な性格を判断するのに重要な関連をもっている。同協会が、アフリカニスタ・コロニアリスタのプロパガンダの場であり、その役を担ったという指摘は一つの結論であろう。R. Torres Campos が、F. Coello の死を悼んだ紙牌は、計らずもこの見解を明瞭に示す結果となった。F. Coello が率いたマドリッド地理学協会は、「地理学を教授する学校であり、スペインの主権・歴史的権利を脅かす国際的係争問題に対処するために政府に必要な情報を提供するセンターであり、スペインの国外・植民地における活動を支持しそれを広く知らしめ、探検・旅行を後援する²³⁾」ものであった。

次節では、マドリッド地理学協会機関誌 Boletín に掲載された内容を通じ、同協会が果たした役割を帝国主義的拡大との絆において一面的に規定するのとどまらず、次の時期につながる近代地理学の導入・受容、地理教育の制度的

確立等の問題との関連で検討を試みたい。

2. マドリッド地理学協会の活動と果たした役割

機関誌 Boletín には、①通常例会での報告を基に著された論説、②メモリアと題する地理に関する展望、③地理的情報を提供する雑録、④評議員会会議録等の協会関連記事が掲載されている。

本節では、論説を中心に分析を試みることにするが、その前に②メモリア、③雑録に関して簡単にふれておきたい。

メモリアの執筆者は、F. Coello (Boletín I～IV)、C. Fernández Duro (Boletín V～VII)、Martín Ferreiro (Boletín VIII～XXXVII)、R. Torres Campos (Boletín XXXVIII～XXXIX)、R. Beltrán y Rospide (Boletín XL～XLII) で、マドリッド地理学協会の実務を中心的に担ってきた会員である。なかでも、執筆様式を決定した F. Coello による 1 巻のメモリア、R. Torres Campos の XXXIX～XL 巻に掲載された「1897年の地理学」、R. Beltrán y Rospide の XL I～XL II 巻に掲載された「1898年の地理学」と各々題されたメモリアは長文のものとなっている。スペインから始まり、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、アメリカ、大洋州、北・南極と地域別に各国の状況が記されているが、地理的事実として関心の向けられた記載事項は、探検、側地・地図作成状況、地理学会活動状況に係るものが多く、それらの地理的事実を理論的に再構成するのではなく、情報提供として記述されているにとどまっている。その情報入手の出典は明らかでない。ただし、R. Torres Campos、R. Beltrán y Rospide の1897、1898年のメモリアになると参考資料が付され(各国学会誌が多い)、また、初めに当時の地理学理論を紹介し、理論的関心を示しているが、その視角から後半の大部分を占める地理的事実の記載が試みられているわけではない。

記録に関しては、様々な情報が記されるが、注目されるのは、植民地に関する情報、スペインのセンサス結果などの統計資料の転載、地名

のカスティリャ語による記載方法の統一などである。地名の記載に関しては、外国地名に限らず、スペイン各地域の地名記載をどのようにするのか、決して容易な問題ではなかったのである。

論説として掲載された各々の論文の主題は、この期（1876—1901）のマドリッド地理学協会の活動と密接に関連し、その活動の意図を反映している。取り扱われている主題の内容を分類すると、論文数の多少にしたがい、①アフリカ・植民地に関する報告、②歴史地理的研究、③地理学国際会議に関する報告、④地理学の効用・地理教育に関する研究に大別できるが、④に関する論文数が非常に少ないのがこの時期の特徴となっている。以下、上記の配列にしたがい、さらに内容を具体的に検討したい。

①アフリカ・植民地に関する報告 R. Beltrán y Rospide によって纏められた総目録のうち「地域別分類項目」を参照しても、アフリカについての情報量が他地域を圧している²⁴⁾。中でもモロッコ、ギニア湾岸地域が多い。1870年代初めのスペインにとって、アフリカに対する最大の関心は、モロッコ占領の決め手となるサンタ・クルス・デ・マル・ペケーニャ（カナリア諸島対岸）とスエズ運河をてフィリピンへの通商ルート確保のための紅海沿岸に向けられていたことによる。アフリカ探検委員会支部は、このような状況下で結成されたのであり、アルフォンソXII世および同支部後援の下に、上記2地域への探検が組織されたのである。1878年のガテルによるblasco・デ・ガレイ探検（イフィニとサンタ・クルス・デ・マル・ペケーニャの調査と目的）および1879年のアバルゲス・デ・ソステンによるアビシニア探検（紅海沿岸調査を目的）であった。これらの結果は、マドリッド地理学協会通常例会で報告され、Boletín に掲載された²⁵⁾。1870年代のアフリカ探検は、それ以前の探検と性格を異にし、科学的調査・発展への貢献を標榜してはいるものの、その使命は、アフリカの文明化＝ヨーロッパ化を旗印に、祖国主権の確立であり、経済的利益獲得のため

の通商路の確立・植民開拓であった。かつての広大なラテン・アメリカ植民地を失い、最後の植民地アンティリャ諸島、フィリピンをめぐってアメリカ合衆国の覇権と対峙していたスペインにとって、アフリカは、没落しつつある帝国の再生を求める活路であったのである。その理的唱導者がホアキン・コスタ Joaquin Costa であった。ここで問題となるのは、前節の最後に指摘したようなマドリッド地理学協会の歴史的立場づけに関連し、上述のようなアフリカをめぐる社会的状況に対する同協会の対応である。具体的には、アフリカ探検委員会スペイン支部と同協会との関係である。同協会内部に亀裂を引きおこさなかったわけではない。1878年月9日の評議員会において、F. Coello は、同協会の目的は、地理学の問題の研究にあり、探検の仕事はアフリカ探検委員会支部の事業であることを認めつつも、それに無関心であることはありえず、地理的知識の普及の点からも Boletín を通じてかかわっていくことの重要性を指摘している²⁶⁾。同協会は、イタリア地理学会のように直接的に探検隊を組織するだけのファンドをもっていなかったのである²⁷⁾。フランス地理学会の要請により、F. Coello は、19世紀におけるスペインの探検・旅行をリストアップしたが、同世紀末の探検はいずれもアフリカ探検委員会支部の後援によるものであった²⁸⁾。Boletín はこれら探検・旅行記を掲載しているが、アフリカに関する掲載論文を特徴づけるもう1つの内容は、係争となっている植民地分割のスペインの正当性を史資料を駆使して裏づけることであった。C. Fernández Duro のアフリカ北西海岸沿岸への探検について記した論文がその代表である²⁹⁾。

アフリカに対する関心は、スペインの国益に合致するものであり、マドリッド地理学協会にとっても無関係でないという見解は、F. Coello に固有のものではなく、同協会の活動を中心的に担った R. Torres Campos, Martín Ferreiro, Adolfo de Motta, Fernández Duro 等によっても、Boletín の協会関連記事で繰り返し強調

されている³⁰⁾。その意図が、関心の低い世論の喚起であったことは言うまでもない。このような傾向を鼓舞したのが J. コスタであったのである³¹⁾。コスタは、1883—1885年間、マドリッド地理学協会会員として重要な位置を占め、1833年5月の評議会で、マドリッド地理学協会は創設後7年を経て今や初期の活動段階を終え、アフリカ大陸の探険と開拓に向けて世論を喚起すべき新たな段階に入るべきと提案し、同協会の重鎮を動かし、マドリッドで「スペイン植民地・商業地理大会 el Congreso Español de Geografía Colonial y Mercantil」を組織したのである。参加者は1,200に及び、Coello, Ferreiro, Rozpide, Concas, Ami, Rodrigues, Montes de Oca, Fernández Duro 等を中心に、とくにモロッコに関する植民地政策問題が報告・討論された。18項目にわたるモロッコ植民地政策が政府に提言されている。翌年1884年には、F. Coello を大会組織委員会として、同様の大会がグラナダのアルハンブラ宮殿で開催され、ギニア湾岸地域、サハラに関する問題が論議されている。1884年、アフリカ探険委員会支部はモロッコに関する提言を議会に送ったが、マドリッド地理学協会をはじめとして、その主旨に賛同した国内外32団体による議会への同様の請願をなさしめている³²⁾。

1883—1884年に頂点に達したアフリカに対する関心は、その後のコスタの関心の衰退とともに同じ命運を辿る。その背景には、スペイン政府にとってアンティリャ諸島やフィリピンの死守が最大の問題となり、アフリカどころではなくなったことがある。絶望したコスタはアフリカ問題にかかわることから遠ざかっていったのである。アフリカニスタとしてのコスタの活動はとくに1881—1888年までで、植民地地理協会の機会誌 *Revista de Geografía Colonial* で自説を展開している。同 *Revista* は、1897年からは *Revista de Geografía Colonial y Mercantil* となり、マドリッド地理学協会から発刊されることになる(1924年まで)。この経緯は、コスタの退場と無縁ではなく、アフリカ熱の沈

下に側応するものであった。決定的になったのは、キューバ、フィリピンを失った1898年である。周知のように、1898年はスペイン史にとって重要な節目となったが、その歴史的瞬間に遭遇し、マドリッド地理学協会はどのような反応をしたのか興味のあるところである。1898年のメモリアで、R. Beltrán y Rozpide は、このような危機に直面し、マドリッド地理学協会は、スペインの植民地政策に新しい方向と地平を開くのに役立つであろうこと、植民地に関連する資料や教育を普及するのに重要な役割を果たしてきたことを明らかにさせるべきことを述べ、また Gonzalo de Reparaz は、植民地を失っては地理学はありえないと明言している³³⁾。

⑥歴史地理的研究

歴史地理的研究の動向も⑥を特徴づけていた同協会の歴史的性格と無関係ではない。論文内容からまず第1にあげられるのは、探険・旅行に関するもので、この分野におけるスペインの業績を知らしめることを意図している。例えば、A. Cánovas de Castillo や Rada y Delgado の Juan Sebastian del Elcano に関する論文、スペインによるサンドウィッチ・ハワイ諸島の発見についての Martin Ferrero の論文、中世におけるスペイン旅行家を取りあげた A. Lasso de la Vega の論文、外国人による15世紀のスペイン旅行を記した J. Facundo Riaño の論文などはその代表的な例である。イタリア語版からではあるが、1519—1522年の A. ピガフェッタ世界一周を翻訳・解説した D. Walls y Merino の仕事もこの範疇に入ろう³⁴⁾。

第2にあげられるのは、ラテン・アメリカに関するものである。F. Coello はマドリッド地理学協会創設の辞で、古文書に死蔵されている貴重な史資料のスペイン人による利用と、未刊行史料の刊行が協会に課された一つの仕事であると述べているが、その結果として J. López de Velasco の1571—1574年間のインディアスに関する地理および一般的記述が、D. Justo Zaragoza の解説により掲載され、また、R. del Castillo y Quatiellerz は16世紀の F. コロンの

未刊行史料を刊行した。1861—1865年の太平洋の科学的探険に加わった D. M. Jimenez de la Espada は、キトー県のマラニョン川およびイエズス会宣教国の記録を長論文にまとめている³⁵⁾。

第3にあげられるのはスペインの歴史地理に関連するもので、J. Villa-Amil y Castro のシスネロス時代のベルベリア、Eduado Saavedra のエドリシのスペインの地理、Antonio Blázquez の訳によるストラボン——イベリアに関する記述等がその例である³⁶⁾。

この分野での主要な論文は、歴史アカデミー会員によるものが多い。マドリッド地理学協会の会員構成のうち、専門的科学家集団の中で歴史学の専門家が多いことは既に記したが、同協会の中心的メンバーであった F. Coello, F. Duro, M. Ferreiro, E. Saavedra も歴史アカデミー会員にノミネートされている。

◎地理学国際会議に関する報告および④地理学の効用・地理教育に関する研究

1876—1901年の間に開催された地理学国際会議は、1881年ベニス大会（第3回）、1889年パリ大会（第4回）、1891年ベルン大会（第5回）、1895年ロンドン大会（第6回）、1899年ベルリン大会（第7回）で、各々について参加者による報告論文が Boletín に掲載されている³⁷⁾。これらの国際会議報告に加え、フランス地理学会参加報告論文が、短文ではあるが同様に掲載され、当時の地理学的研究の最前線を伝えている。本論の分析対象期間中に、地理学論として掲載された論文は、E. ルクリュのものにすぎないことを勘案すると³⁸⁾、体系的なものではないにしろ、国際会議報告論文が、ドイツ・フランスの近代地理学導入の一経路として貢献したとみることができる。この点から重要なのが、1895年ロンドン大会に代表として参加した R. Torres Campos の長文の報告論文である。J.-J. Dubois による国際地理学会参加者の社会的構成の推移を参照すると、地理学専門家が過半数をこえるのは、1891年ベルン大会以降であり³⁹⁾、この点からも R. Torres Campos の報

告論文は注目される。

報告論文は、セクションごとに記述され当時の地理学界の国際的水準および社会的関心を反映しているが、その中でも、A. ペンクの地形学、同じくペンクによって提唱された1:100,000地図作成の各国における進捗状況、E. ルクリュの1:100,000地球儀作成提案、チャレンジャー号探険報告、アフリカの植民・地図作成等は興味深いテーマである。しかし、R. Torres Campos の最大の関心は、地理教育に向けられ、最大のスペースをさいて、講演・討論の結果が紹介されている⁴⁰⁾。M. Levasseur によってなされたフランスにおける地理教育の制度的確立、教育内容、現状の問題に関する報告がその大半を占めているが、続いて Ricard Lehman によるイギリスの大学における地理教育、A. J. Herbertson および H. J. Mackinder による地理教育の組織化に関するイギリスの問題、M. L. Drapeyron による地理教育におけるエクスカージョンの重要性の指摘などが、会議の流れに沿って記述されている。R. Torres Campos の関心の根底にはスペインにおける地理教育の制度化の遅れに対する焦燥感があることはいうまでもない。さらに、そのような状況に不可分の社会的土壌として「地理的文化 la cultura geográfica」の未成熟にも目が向けられている。地理教育が、学校教育制度によってのみなされるのではなく、イギリスにおけるように豊かな「地理的文化」を作り出す環境によっても促進されるという認識である⁴¹⁾。

ここで問題となるのは、スペインにおける地理学の普及と地理教育の制度化に関連し、マドリッド地理学協会がその活動を通じてどのように係わったのかということであろう。

スペインにおいて、大学等の高等教育機関に地理学専門講座が設置されたのは1901年である。それ以前は、自然地理学関連分野の課目が理学部に開講されるか、歴史学の補助学問として文学部に開講されるにすぎなかった。地理教育は専ら初等教育に限られ、しかもその水準は決して満足のいくものではなかった。従ってマ

ドリッド地理学協会の活動の1つとして地理教育改革が、同協会の中心メンバーの共通認識であった。しかし、1876—1901年間に *Boletín* に掲載された地理教育に関する論文は、ヨーロッパにおける地理教育をサーベイした Segundo Moret の論文、自由教育学校の *Boletín* に掲載されたフランスのエコールノルマン教授 A. Marie Gochet の論文の転載がみられるにすぎず、この分野におけるみるべき成果があがるのは今世紀に入ってからである。したがって、スペインにおける地理教育論あるいはその制度的確立に関しては稿を改めて論ずることとし、本稿では、分析対象期間における状況を概観するにとどめる。

地理学の普及・地理教育の改革が論じられたのは主に評議員会においてであり、特に注目されるのは、1878年4月9日 (*Boletín* IV, p. p. 350-353), 1880年3月23日 (*Boletín* VII, p. p. 366-367), 1892年4月5日 (*Boletín* XXXII, p. p. 385-386) の会議録である。1892年4月5日の会議では、大学における地理学講座の設置を(理学部に自然地理学, 文学部に政治・歴史地理学), 文部省に要求することが再確認されている。さらに1894—1896年にかけての評議員会では、初等教育用の教科書の作成 (M. Ferreiro が担当) をめぐって論議が繰り返され、最終的に『教科書と地図 *Texto y Atlas*』が同協会によって承認され文部省に提出されたが印刷されることなく終わっている⁴³⁾。地理教育の改革の推進を阻む困難は、まず第1に、地理教育改革どころではない全体の教育改革の計画策定がまず緊急課題であり、広い関心を集めていたことにあった。全体の教育改革の中に地理教育改革を的確に位置づけえなかったのである。第2には、現行法規の下では、教育プログラム、教科書選定は教師の自由に担されており、同地理学協会が要求する統一的教科書の利用を強制できないことにあった。R. Torres Campos は、地理教育計画や教科書の多くが、スペインにおける「地理的文化」の未成熟を象徴しているとしている。19世紀のヨーロッパ諸国における地

理教育の制度化を推進した基本的要因として、中央集権的国家体制の確立に伴う教育改革(国家による教育の掌握)、ブルジョア社会の勃興とナショナリズムの昂揚に伴う国家に対する帰属意識の醸成が指摘され、その結果としての歴史学・地理学に対する関心の増大が説明されている。スペインにおける「地理的文化」の社会的未成熟の問題は、以上のような「近代化」過程のスペインに固有な問題に制約されたものに外ならない。マドリッド地理学協会の中心的メンバーが依拠していたのは、西欧社会をモデルとした近代化推進の立場であったといえる。

地理教育の内容の刷新、近代的方法の導入を最も具体化したのは、L. García Martín のメモリアであった⁴⁴⁾。地理学を基礎とし、自然と人間との関係を自然地域ごとに把握、地理的統一の概念の重視、身近な地域から拡大させていく同心円的地域認識の援用、地形図の利用、エクスカージョンの採用等は、M. Ferreiro の教科書にも導入されたのである。

1890年代に、マドリッド地理学協会のスペイン人会員は150~160名を数えるにすぎなくなり、地理学の普及・地理教育改革推進のための活動の具体的方策は、中心的メンバーの個人的関係を利用し、関係官庁・政府要人に働きかけるにとどまっている。R. Ballester y Castell や J. Vilà Valentí が指摘するように、地理学の普及・地理教育改革に関しては関心が拡散しており、その活動も一貫性を欠いていたといえよう。

IV 結論

P. E. James はその学説史において(注2参照)、ドイツの大学において初めて地理学講座が開設された1874年から1945年までの地理学を、近代地理学として区別している。同様の視点から、T. W. Freeman は、この期の近代地理学の特徴的な要因として、時代の流れに沿いながら①西欧社会にとって未知の地の地理的情報の集積に伴う百科辞典的傾向、②地理教育の重視、③植民地主義の昂揚との密接な関連、④地理的事実の単なる記述から一般的理論による説明を

試みる「新しい地理学」への移行、⑤政治との結びつき、⑥専門分野の細分化をとりあげている⁴⁵⁾。本論で対象とした1876—1901年は、①～④に特徴づけられる時期に相当し、マドリッド地理学協会もそれらの特徴を共有している。同地理学協会の創設は、ヨーロッパ諸国において諸学会の創設が相次いだ1870年代であり、その活動が頂点に達したのは、1880年代、アフリカに対する植民地政策をめぐる開催された2回の大会の折であった。地理学の有効性は、国際・国内政治への直接的応用と主張されたのであった⁴⁶⁾。マドリッド地理学協会の創設は、スペインにおける近代的国家体制の確立とナショナリズムの昂揚、出遅れたアフリカへの植民地的拡大の必要性のプロパガンダと無縁ではなかったことは、前章までに記した通りである。しかし、他方で、限界的なものではあれ、近代地理学の導入、その普及のための地理教育の制度的確立の重要性が指摘されてきたのも確かである。1898年、スペインの転換期に際し、植民地政策の新たな方向と地平を開くために、マドリッド地理学協会が従来果してきた役割を提起すべきであると始められた R. Beltrán y Rozpide の論説は、その序章において、むしろ、フンボルト、リッター、ラッツェル、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュ、E. ルクリュの説を引用しながら、「新しい地理学」の方法、概念を概観している⁴⁷⁾。R. Beltrán y Rozpide は、F. Coello, F. Duro, M. Ferrero, R. Torres Campos のマドリッド地理学協会第一世代から、アカデミック地理学が形成されてくる次の世代との移行世代として位置づけられよう。地理学論、地理教育論がより多く展開される次期へつながる芽は、この時期にあるのである。

スペインにおける「近代化」の遅れは、マドリッド地理学協会の推移にも反映している。1890年代末、フランスでは30に達する地理学会が、総数にして約2万人、ドイツでは25地理学会で約1万人、イギリスでは6地理学会で約1万人の会員を擁していたのに、スペインではマドリッド地理学協会のみでその会員数は150人

にすぎなかった⁴⁸⁾。20世紀に入り、バルセロナでカタラン研究所に附属する活動として地理学会が創設されたにすぎない。カタラン地域主義の昂揚の結果であった。ナショナルなレベルから発想したカスティリャのマドリッド地理学協会という性格が、リージョナルなレベルでの発想に固執する各「地域 *región*」にとって相入れないものがあったのか、「地域主義」との関連に興味あるテーマであるが、今後の研究課題としたい。以上のような傾向からも、地理学先進諸国に比して、アカデミック地理学の形成の遅れが重要な問題であった。この点に関しては、1901年以降のマドリッド地理学協会の活動の分析にとって不可欠の課題となる。本論においては、史資料の関係から、マドリッド地理学協会のみならず分析の焦点をあてたが、地理教育においてどのような教科書が実際に使われていたのか、専門的に地理学を修得した教師はほとんどいないとはいわれてもその実態は実際にはどうであったのか、広く一般的に地理書として読まれていた本はどのようなものであったのか等々の分析が、スペインにおける地理学界をひろく考えるには必要であろう。いずれも容易ではないが今後の課題としたい。

〔注〕

- 1) T. W. Freeman : *Geographical Societies of Great Britain and Ireland, Abstracts of Papers of the 25th International Geographical Congress, Tomo I, Section VI, Theme 19 : History of Geography and History of Cartography.*
- 2) Preston E. James : *All Possible Worlds, A History of Geographical Ideas*, New York, 1972, 622p., R. J. Johnson : *Geography and Geographers, Anglo-american Human Geography since 1945*, London, 1979, 232p., E. H. Brown (ed.) : *Geography, Yesterday and Tomorrow*, Oxford, 1980, 302p., T. W. Freeman : *A History of Modern British Geography*, London, 1980, 258p., Numa Broc : *L'établissement de la géographie en France, diffusion,*

- institutions, projet, Annales de Géographie, No. 459, 1974, pp. 545-568, Numa Broc : La géographie française face à la science allemande (1870-1914), Annales de Géographie, No. 473, 1977, pp. 71-94, A. Fierro : la Société de Géographie (1821-1946), Paris, 1983, 343p.
- 3) 石田龍次郎『『東京地学協会報告』(明治12—30年)』『日本における近代地理学の成立』大明堂, 1984, 84—169頁。
- 4) P. クラヴァル『現代地理学の論理』大明堂, 1975, 49頁。
- 5) 2), T. W. Freeman, pp. 1—9
- 6) H. Capel Saez : ① Institucionalización de la Geografía y Estrategias de la Comunidad Científica de los Geografos, Geocritica, No. 8 y 9, 1975 y 1977, 26p., 30p., ② Organismo, Fuego Interior y Terremotos en la Ciencia Española del Siglo XVIII, Geocritica, 27/28, 1980, 94p., ③ Filosofía y Ciencia en la Geografía Contemporánea, una Introducción a la Geografía, Barcelona, 1981, 509p., ④ Los Diccionarios Geograficos de la Ilustración Española, Geocritica, 31, 1981, 49p., ⑤ Geografía y Matemáticas en la España del Siglo XVIII, Barcelona, 1982, 389p., ⑥ Edición y Estudio Introductorio Manuel de Aguirre : Indagación y Reflexiones sobre la Geografía con Algunas Noticias Previas Indispensables (1782), Barcelona, 1981, 339p. ⑦ (Edición y Estudio Preliminar) Bernhard Varenius : Geografía general en la que se explican las propiedades generales de la tierra, Barcelona, 1980, 144p. ⑧ H. Capel Saez, M. Araya, M. Brunet, J. Melcon, F. Nadal, L. Urteaga y I. Sanchez : Ciencia para la Burguesía, Panorama Pedagógica y Enseñanza de la Geografía en la Revolución Liberal Española, 1814—1857, Barcelona, 1983, 355p.
- 7) 6) ③ pp. 173—206
- 8) M. Alonso Baquer : Aportación Militar a la Historia Contemporánea, Madrid, 1972, pp. 175—180.
- 9) J. Vilá Valentí : Origin y Significado de la Sociedad Geográfica de Madrid, Revista de Geografía, 9—1-2, 1977, pp. 5—21
- 10) Boletín de la Sociedad Geográfica de Madrid, I, 1876, pp. 5—13
- 11) Boletín, I, 1876, pp. 16—33
- 12) Boletín, I, 1876, pp. 45—53
- 13) Boletín, XLIII, 1901, pp. 406—422
- 14) 6) ③ p. 186
- 15) 2) E. H. Brown (ed.), p. 3
- 16) 3) p. 101
- 17) 3) p. 101
- 18) Boletín, XL, 1898, pp. 307—310, なお F. Coello に対する紙牌は, 同巻 pp. 1—47
- 19) F. Coello の地図コレクションは, 彼がスペインの古文書館であるいはフランス陸軍所蔵のスペインに関する地図を複写したものも含め37,000点に達し, スペイン陸軍地図資料室の基礎をつくった。8) pp. 282—283.
- 20) 8) pp. 125—195
- 21) 6) ④
- 22) F. Coello : Asociación Española para la Exploración del Africa, Boletín, II, 1877, pp. 429—443, Asociación Internacional Africana, Boletín, III, 1877, pp. 29—57, pp. 97—116.
- 23) R. Torres Campos : Coello en la Sociedades Geográficas Españoles, Boletín, XL, 1898, p. 35
- 24) R. Beltrán y Rozpide : Repertorio de Publicaciones y Tareas de la Sociedad Geográfica de Madrid (1876—1900), 193p.
- 25) D. Joaquín Gatell : Viajes por Marruecos, el Sur, Uad-Nun y Tekna, Boletín, IV, V, VI, 1878, 1879, J. Víctor Abargues de Sostén : Noticias acerca de la Expedición Científica, Geográfica y Mercantile, Boletín, XV, 1883, pp. 233—325.
- 26) Boletín, IV, 1878, p. 347
- 27) 竹内啓一「イタリア地理学会と北アフリカ」日本地理学会地理思想史研究グループ1985年2月例会報告。
- 28) F. Coello : Sumaria Relación de los Viajes y Exploraciones hechas por los Españoles en el Presente Siglo, Boletín, XXX, 1889, pp. 177—186. 最近, 18・19世紀の科学探険旅行に関する史料集が刊行された。 Maria de los

- Angeles Calatayud Arinero : *Catalogo de las Expediciones y Viajes Cientificos Españoles, Siglo XVIII y XIX*, Madrid, 1984, 433p.
- 29) C. Fernández Duro : *Exploración de una parte de la Costa Noroeste de Africa*, Boletín, IV, V, 1878, 1879, pp.155—241, pp.17—57, *El Derecho a la Ocupación de Territorios en la Costa Occidental de Africa*, Boletín, XLII, 1900
- 30) T. García Figueras : *La Sociedad Geográfica de Madrid*, en *La Acción Africana de España en Torno al 98 (1860—1912)*, Tomo I, Cap. VI, pp.97—120. L. García Martín : *España en Africa, Culpas ó Faltas del Siglo XVII que paga el XIX*, Boletín, VII, 1879, pp.26—81.
- 31) アフリカニスタとしてのニスタに關しては,
30) Cap. VII, pp.121—144.
- 32) *La Política Hispano-Marroquí y la Opinión Publica en España*, Boletín, XVII, XVIII, 1884, 1885, pp.36—58, 161—178, 321—357, 91—106.
- 33) Rafael M. de Labra : *Las Colonias Españolas después del Tratado de París de 1898*, Boletín, XLII, 1900, pp.3—110.
- 34) A. Cánovas del Castillo : *Juan Sebastián de Elcano*, Boletín, VI, 1879, *Rada y Delgano : Oda á la Memoria de Juan Sebastian de Elcano*, Boletín, XI, 1881, *Martín Ferreiro : Las Islas de Sandwich ó Hauaji Descubiertas por los Españoles*, Boletín, II, 1877, *A. Lasso de la Vega : Viajeros Españoles en la Edad Media*, Boletín, XII, 1882, *D. Walls y Merino (anotado) : Primer Viaje alrededor del Mundo*, relato escrito por A. Pigafetta, Boletín, XXXVIII—XL, 1897—1899.
- 35) D. Just Zaragoza (adiciones é ilustraciones) : *Geografía y Descripción Universal de la Indias*, copiada por J. López de Velasco, Boletín, VIII—XI, XV—XXI, XXXVI, 1880—81, 1884—86, 1894—95, R. del Castillo y Quartillierz : *Documento Inédito del Siglo XVI* Referencia á D. Fernandez Colon, Boletín, XV, 1883, D. M. Jimenez de la Espada : *Noticias auténtica del famoso río Marañon y misión apostolica de la Campania de Jesús de la provincia de Quito en los dilatados bosques de dicho río*, Boletín, XXVI—XXXIII, 1889—92.
- 36) J. Villa-Amil y Castro : *Berbería en Tiempo de Cisneros*, Boletín, VII, 1879, *Eduardo Saavedra : La Geografía de España del Edrisi*, Boletín, X—XII, XIV, XVIII, XXVII, 1881—82, 1883, 1885, 1889, *Antonio Blazques (traducido) : Estrabón, Descripción de Iberia*, Boletín, XLII, 1900.
- 37) ① *Martín Ferreiro : Conferencia acerca del Congreso Geográfico Internacional de Venecia*, Boletín, XI, 1881, pp.337—358, ② *R. Torres Campos : El Congreso y la Exposición de Geografía de París en 1889*, Boletín, XXIX, 1890, pp.7—48, ③ *R. Torres Campos : El Congreso y la Exposición de Geografía de Berna*, Boletín, XXXV, 1893, pp.150—200, ④ *R. Torres Campos : La Geografía en 1895, Memoria sobre el VI Congreso Internacional de Ciencia Geográficas*, Boletín, XXXVIII, 1896, pp.3—287, ⑤ *D. E. Jiménez Lluesma : El Congreso Internacional de Geografía de Berlín*, Boletín, XLI, 1899, pp.249—282.
- 38) *E. Reclus : Geografía Humana, Lección de Apertura de Curso de Geografía en el Espacio y en el Tiempo*, Boletín, XXXVI, 1894, pp.271—283.
- 39) 1871年第1回大会では、軍人・外交官・政治家30.8%, 地理学者22.1%, 関連分野研究者18.1%であり、地理学が制度化されていない段階での参加者の社会的構成の多様性を示している。ベルン大会では地理学者が57.4%に達し、軍人・外交官・政治家は19.3%にまで減少している。
- J. Jacques Dubois : *Essai sur les professions de membres des Congres*, in *Geography through a Century of International Congress*, IGU Publication, 1972, Caen, p. 53.
- 40) 37) ④ pp.197—267
- 41) 37) ④ p.260.「地理的文化」とは、新聞・商業通信等のマスメディア、商人や旅行家あるいは植民地居住者、植民地探険家等を通じてもたらされ

- る世界各地からの地理的情報量の豊かさを彼は意味している。
- 42) Alexis Marie Gochet : Del Materia de Enseñanza de la Geografía, Boletín, XXVIII, 1890, pp. 217—235
- 43) R. Ballester y Castell : Investigaciones sobre Metodología Geográfica, Boletín, L, 1908, pp. 177—186.
- 44) L. García Martín : Los Medios de propagar el estudio de la geografía, Boletín, IV, 1878, pp. 375—386.

- 45) J. W. Freeman : A Hundred Years of Geography, London, 1961.
- 46) R. Beltrán y Rospide : La Geografía en 1898, Amplio concepto de la geografía en nuestros días, Boletín XLI y XLII, 1899 y 1900, p. 12.
- 47) 46) pp. 7—18
- 48) 46) pp. 15

本稿は、昭和59・60年度文部省科学研究費総合研究A（研究代表者九州大学野澤秀樹，課題番号59380021）による研究成果の一部である。

The Activities of the Geographical Society in Madrid
in the Early Period (1876-1901) : An Aspect of
Modern Geography in Spain

Hisako Kurihara

After the founding of the Société de Géographie de Paris in 1821, several geographical societies came into being in the main cities of Europe and by the end of the 1860's there were eighteen of them. During the next decade, a total of thirty-four new societies were established, again in various cities of Europe. All this was an expression of the nationalistic upheavals taking place in the countries of Europe, the increased demand for geography instigated by European colonialist expansion, especially in Africa, and the subsequent necessity of the institutionalisation of geographical education. As is clearly delineated in the statement of F. Coello, one of its founders, the *Sociedad Geográfica de Madrid* was established under similar circumstances, in the year 1876.

Up till the end of the nineteenth century, the *Sociedad Geográfica de Madrid* retained its initial character as an organisation having the encouragement of nationalism as its aim. In 1901, however, the society changed its name to the *Real Sociedad Geográfica* and, furthermore, altered its orientation to conform more closely so the academic world; hence, a larger number of papers dealing with theoretical considerations on geography and geographical education were published in the society's organ. In this paper, the author examines the activities of the society from the time of its foundation up to the year 1901 through its organ, the *Boletín de la Sociedad Geográfica de Madrid*.

During the period in question, the character of the society was clearly reflected in the composition of its membership, that is, the 626 founding members of 1876. Some 56.1 per cent of them were civil or military engineers and cartographers engaged in the compilation of topographical maps of Spain. Persons belonging to Spanish diplomatic or political circles represented 10.9 per cent. Those engaged in scientific or academic activities were represented by 14.0 per cent; of these, the number of geographers was very small.

F. Coello, who played an important role in the foundation of the society, was engaged mainly in the compilation of the national atlas, the maps for which were made to a scale of 1 : 200,000. According to its statutes, the official purpose of the society was the diffusion of geography ; this consisted in the supply of geographical information useful in the implementation of Spanish colonial policies. After the independence achieved by numerous Latin American countries, and under the impact of colonial penetration by other European countries into Africa, the establishment of new colonial policies became a national task for the Spain of the period. In this sense, J. Costa, who mobilised influential members of the society into organising two national conventions of Africanists in 1883 and 1884, was most active. Many papers insisting on the necessity of exploration and the establishment of Spanish sovereignty in Africa therewith appeared in the society's organ. Problems of geographical education within the compulsory system were discussed, with particular reference to the backwardness of geographical culture in Spain. But, in the field of geographical education, the society was unable to develop consistent activities ; M. Ferreiro, for example, prepared a geography textbook for use in primary education, but it was not published.

The society did play an important role in the introduction of modern geography in Spain with the reports on international geographical congresses submitted by R. Torres Campos and others. R. Betrán y Rospide published a long paper entitled "Geography in 1898", in which he reviewed the development of geography in Spain and other countries.

By 1901, the membership of the society had decreased to 316 persons. In that year, the share of those engaged in scientific and academic activities had increased to 25.4 per cent, but many of them were foreign corresponding members, a fact which reflected the backwardness of the development of academic geography in Spain. The share of those concerned with topographical maps decreased to 30.2 per cent in that year. Thus it was that the influence of the Geographical Society of Spain on the formation of academic geography, exercised through the activities of the society, only made itself felt after the commencement of the twentieth century.